

Title	大革命前の佛國, 松本信廣譯
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.4 (1924. 11) ,p.157(627)- 158(628)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19241100-0158">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19241100-0158</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

郷土研究者の奮起を希望する。

猶本書は代表的のもの一部に過ぎ無いかから他日續篇を印行せられむ事を編者にお勧めする。

序ながら自分も亦民謡童謡には興味を持つ一人で、各地旅行の節にはそれを聞かせて貰つて居るが、實に其地の萬狀を語るものである。又昨年来郷土たる對馬の民謡童謡を蒐集して居り、既に一二雜誌に書いたこともあるが、異日餘暇を得たならば整理の上、上梓したいと思つて居る。

(大正十三、九、廿 武田勝藏)

### 大革命前の佛國

松本信廣  
國民圖書株式會社發行

『英文學史』をもつて名高いイポリト・アドルフ・テエヌは、わが國においては從來その名をきくのみにして、實際に彼の著作の紹介に接することがなかつたが、最近その『藝術論』は慶大教授廣瀬哲士氏によつて邦譯され、今また『現代佛國の淵源』の第一卷『大革命前の佛國』(舊制度)が松本信廣氏によつて邦譯された。テエヌは藝術批評家であることも歴史家であつて、個人に及ぼす環境の影響の偉大なることを強調したこゝによつて有名である。即ち個人は孤立したものでなく、その存在は多くの原因の結果であるから、あらゆる場合にまづ民族、環境、時代の三つが研究されねばならないといふのが彼の見地である。而して『現代佛國の淵源』は彼の晩年の作にして、彼の著作中最も傑出したものと言はれ、その目的は『現代フランスは一體何であるか』を説明せんとするのであつて、そのために『舊制度、大革命、新

制度の三状態の正確なる叙述を試みん」としたのである。而して本書は第一卷舊制度、第二卷大革命、第三卷現代政治の三部よりなり、今邦譯されたのは第一卷であつて、大革命前のフランス社會の叙述である。

第一編『社會の組織』においては、僧侶、貴族、及び王者の特權の起原、その性質、その功罪をのべてある。當時の特權階級は『公衆の代表者たらずして、君公の寵人たらんことを志し、羊の群を牧すべき責任を忘れ、反對に却つてその先を剪切した』のであり、また『統治の中心は百弊の中心』であつて、『凡ての不正慘害は、丁度疼痛、炎症の中心の如く此處より發出し、……此處に國家の膿瘍がその頭をもたげ決裂した』のであり、『最後の没落の來る前にフランスは既に崩壞して』をり、『その崩壞は特權階級がその公人としての性質を忘却し去つたためである』ことを論じてゐる。第二編『風習と特質』においては、當時の宮廷の誇耀的生活と貴族のサロン生活の浮華輕佻さをのべ、第三編『主義と精神』においては、革命的精神の組織、その要素たる科學的知識と古典的精神、第十八世紀の特色とする傳統を敵視し、歴史を無視する傾向をのべ、第四編『主義の傳播』においては、フランスに哲學の成功した所以を論じ、また第三階級の勃興と、それが新哲學を奉ずるに至つた経過をのべ、第五編『人民』においては、人民の窮乏とその原因、及び人民の知識状態を論じてゐる。當時の人民は『あたかもあまり強壯になつて人を蹴るのを恐れ、粗末な燕麥の食を少しづつ、しか與へられぬ駄獸の様に、また積荷に馴れて

あるので、長い休息は却て労働よりも害になる驟馬のやうに待遇せられてゐた』のであつて、その原因が苛重なる種々の課税であり、さうして人民が『税金を堪へ難くしたのは、納税に堪へ得る最も有力な者が之を回避したため』で、従つて『課税と特權とは……人民の二大敵であり、之に對し國內到る所に不平が盡きないのである』。かくの如く虐げられた彼等の眼にはあらゆる物象は色眼鏡を通じて映るのであつて『僅かの暗示や言葉が中空の樓閣や荒誕な牢獄を造り上げ、その幻想は彼等には全く現實と見えるのであつた』かゝる人民、かゝる社會に自由平等が主張され、空前の革命が惹起されたのは、むしろ當然と言はねばならない。

要するにフランス革命は歴史上最も興味ある最大事變の一つであつて、その理解には革命の素因の醸された革命前のフランス社會の研究にまたねばならない。而して本書はその目的に對する最良書であつて、今その邦譯を得たことは無上の欣快とするところであり、譯者に對し敬意を表するところにも一般讀書界に本書を推稱したい。

(松本芳夫)

**René Grousset: Le réveil de l'Asie.**

**(L'impérialisme britannique et la**

**révolte des peuples) Paris,**

**Librairie Plon, 1924**

世界大戰以來の歐洲人の疲弊並びにその思潮の轉向は種々なる方面に之を窺ふことが出来るがその一つとして東洋の神秘なる文

明に對する憧憬を數へることが出来る。ルネ・グルーセが一九二二年に著した「亞細亞史」は、實にエジプト以東アジア全體の歴史を一括したる大著であつて從來のアジア史が單なる西人の侵略征服史に過ぎざるに對して現代アジアの背後に連綿たる五千年の偉大なる文化の傳統を闡明せんとする大規模なる試みであつた。

まづ第一卷第一章「古代東邦」に於てカルデア・エジプト・フェニキア・アッシリア・ペルシヤ・ヘレニズム・パルテア・ササン王朝等の文化を略述し、第二章「イスラム」に於てアラビヤ・ペルシヤ・トルコのイスラム文明の諸相を述べ、第三章「十字軍」に沿つてビザンチン・フランス各十字軍、最後にトルコの勝利を説明し、第二卷に於ては筆を東方に轉じて第一章「印度」に於てバラモン教と佛教について述べ、アレキサンダーの東征よりギリシヤ、佛教文明の融合を語り、アリア人の國家、ドラビダ民族の文化を説き、第二章「支那」に於て古代支那より北魏、唐、宋の文化の變遷を叙述し、第三章「印度支那」に移り、同地に於る印度の勢力、クメル・チャム兩國、並びに支那の勢力、安南民族の歴史を叙し、第三卷は筆を蒙古民族の世界征服に起し、支那、中亞、ペルシヤに於るその國家建設を説明し、チムールに及び、此民族の雄飛が東西文化の接觸融合をもたらしたることを説き、第二章に於て蒙古の羈絆を脱したる後のペルシヤ史、第三章に於てマホメット教の印度侵入、モンゴル帝國の建設、印度人の反動を述べ、轉じて第四章に元滅以後の支那史を述べ、滿洲朝